

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 6月 5日現在

機関番号：13901

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011 ～ 2012

課題番号：23652035

研究課題名（和文）

文化の越境と翻訳に関する国際的研究

研究課題名（英文）

International Research on Trans-Frontier Culture and Translation

研究代表者

齋藤 文俊 (SAITO FUMITOSHI)

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：90205675

研究成果の概要（和文）：本研究は、研究代表者および研究分担者が所属する「名古屋大学文学研究科附属日本近現代文化研究センター」がこれまで行ってきた、現代日本文化に関する国際的研究プロジェクトを継続発展させたものであり、異文化間・異言語間の翻訳の問題について、「文化の越境と翻訳」の問題としてとらえ直し、国際的に考察していくことを目指したものである。2011年度においては、上海において、国際シンポジウム「文化の越境、メディアの越境——翻訳とトランスメディア」を開催し、翻訳の問題を超越的に研究していくことができた。2012年度には、2011年度の成果をふまえ、さらにこの問題を「東アジア関係学」という枠組の中で再構築することを目指し、国際シンポジウム「東アジア関係学の構想」を開催することで、「文化の越境と翻訳」を超越的・国際的に研究していくことを可能にした。

研究成果の概要（英文）：The present research continues the development of an international research project on modern Japanese culture, which has been conducted until now by the Research Center for Modern & Contemporary Japanese Culture at the Nagoya University Graduate School of Letters to which the representative scholars and research members belonged; it aims examine internationally the issue of trans-cultural and trans-lingual translation and to reconsider this issue as a problem of “trans-frontier culture and translation.” In the 2011 academic year, an international symposium was held in Shangai entitled Traversing Cultural and Media Boundaries: Translation and Transmedia and interdisciplinary research was conducted on the problems of translation. In 2012, applying the results of 2011, we aimed to further restructure this issue within the framework of research on East Asian relations studies, holding an international symposium entitled Towards Studies of East Asian Relations, thus making possible the international and interdisciplinary study of “trans-frontier culture and translation.”

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：表象文化論・翻訳・日本文化・文化の越境・メディア

1. 研究開始当初の背景

従来、翻訳の問題については、言語間の翻訳、あるいは文学作品の翻訳の問題として扱われていた。しかし、翻訳は言語や文学作品

だけの問題にとどまらず、文化全体の問題としてとらえていく必要があり、従来の研究だけでは限界がある。そこで、それら個々の研究を統合しつつ、さらに、映像作品や表象芸

術をも対象にした「文化翻訳」の問題として超域的に扱うことで、あらたな翻訳学を構築することが必要であり、そしてそのためには、近年欧米で活発な動きを見せている翻訳学（トランスレーション・スタディーズ）の成果を積極的に取り入れることが不可欠である。

本研究の母体となる名古屋大学文学研究科附属日本近現代文化研究センターは 2008 年 10 月 1 日に発足したが、発足後、「近現代の日本文化」を解明するため、様々な国際シンポジウムを開催し、近代文化の諸問題を超域的に、そして国際的に研究してきた実績を有している。このような、これまでのプロジェクトで築いてきた研究方法と国際的ネットワークを基礎として、それを本研究にも適用していく。

2. 研究の目的

本研究は、研究代表者および研究分担者が所属する「名古屋大学文学研究科附属日本近現代文化研究センター」がこれまで行ってきた、現代日本文化に関する国際的研究プロジェクトを継続発展させるものであり、異文化間・異言語間の翻訳の問題について、「文化の越境と翻訳」の問題としてとらえ直し、国際的に考察していくことを目指す。翻訳の研究については、欧米で近年活発な動きを見せている翻訳学（トランスレーション・スタディーズ）の成果を取り入れながら、言葉や文学の翻訳はもちろん、映像作品や表象芸術、そして文化の翻訳の問題を積極的に取り上げ、それを国際的に考察していくことをねらいとする。

3. 研究の方法

本研究は、日本国内のみならず、海外の研究者との共同研究によって得られた知見を、広く社会に公開することに大きな比重をおくものであり、そのため、国際ワークショップおよび国際シンポジウムを開催することが、各年度の主たる事業となる。

名古屋大学には「名古屋大学上海事務所」があり、そこを東アジアにおける研究拠点として活用していく。

また、研究体制は、名古屋大学文学研究科附属日本近現代文化研究センターの教員を核として、そこに、研究協力者として、同センターの機関誌の **Editorial Advisors**、またこれまで同センターのプロジェクトに参加していただいた研究者を中心に、国内外において、翻訳や文化、またメディアアートなどの専門家に協力を仰いだ。

4. 研究成果

2011 年度は、下記の(1)～(3)に記したように、(1)名古屋大学において「文化の越境、

メディアの越境——翻訳とトランスメディア」をテーマにしたセミナーを 2 回開催するとともに、名古屋大学上海事務所（中国・上海）の協力の下、上海交通大学との共催で文化の翻訳をテーマとした(2)講演会および(3)国際シンポジウムを開催した。

(1) セミナーシリーズ (2 回)

「文化の越境、メディアの越境——翻訳とトランスメディア」セミナーシリーズ（日本近現代文化研究センター講演会）

【第 1 回 2011 年 11 月 5 日】

テーマ：「上海租界劇場文化の歴史と表象」
講演者：大橋毅彦（関西学院大学文学部）

【第 2 回 2011 年 11 月 29 日】

テーマ：「東アジアの近代と日本語」
講演者：沈国威（関西大学外国語学部）

(2) 講演会

上海交通大学外国語学院日本語学部講演会
日時：2011 年 12 月 9 日 / 会場：上海交通大学闵行キャンパス / 主催：上海交通大学外国語学院
演題：言葉の境界をこえる —— 日本近代詩史再考——
講演者：坪井秀人（名古屋大学）

(3) 国際シンポジウム

文化の越境、メディアの越境——翻訳とトランスメディア / 日時：2011 年 12 月 10 日・11 日 / 会場：上海マート 4A 会議室 / 共催：名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター・上海交通大学外国語学院外国文学研究所

【シンポジウムの概要】

ある言語から別の言語へ、ある文化から別の文化へ、あるメディアから別のメディアへ……。これまで当たり前のように思われて見過ごされてきた翻訳のプロセスが、いま見直されつつある。そして、私たちは一個の純粋な言語文化の中に生きているのではなく、さまざまな言語、文化、メディアが複雑に交差し合う、いわば翻訳のダイナミズムの中に生きていることが指摘されてきた。このシンポジウムでは、そうした知見をさらに発展させながら、言葉、文学、映像を中心に、言語間、文化間、メディア間の翻訳のプロセスや、そこにまつわる美学的・社会的な問題を考えてみた。

【内容】

12 月 10 日（土）
シンポジウム I：翻訳
< 午前の部 >

- ・張 鈴 (名古屋大学博士課程)
「orient、東洋と東方 (ドンファン)」
- ・励 健 (上海交通大学修士課程)
「『道草』における登場人物の金銭感覚について」
- ・朴 景淑 (名古屋大学博士課程)
「日中対訳における「不」の用法」
- ・質疑
<午後の部>
- ・康 東元 (上海交通大学)
「日本の「推理小説」は中国社会にどう受け入れられているか——「改革開放」以後の翻訳傾向の一つから」
- ・大井田 晴彦 (名古屋大学)
「伊勢物語における「みやび」—和漢比較の視点から」
- ・呉 保華 (上海交通大学)
「志賀直哉の作品「城の崎にて」の語句に関する解釈をめぐって —— 一人の中国人読者の視点から」
- ・全体討論 (司会: 齋藤文俊 名古屋大学)

12月11日 (日)

シンポジウム II: トランスメディア

<SESSION 1>

- ・YING Xiong 応 雄 (北海道大学)
"Becoming-animal and its Speed: Tian Zhuangzhuang's *The Warrior and the Wolf* (2008)"/ 「動物への生成変化、およびその速度—田壮壮の『狼災記』(2008)について」
- ・MIZUNO Masanori 水野 勝仁 (東京芸術大非常勤講師) & MIZUKAWA Hirofumi 水川 敬章 (名古屋大学博士研究員)
"Nature and Destruction on the Computer"/ 「コンピュータにおける自然と破壊」
- ・FUJIKI Hideaki 藤木 秀朗 (名古屋大学) & XU Dongmei 徐 冬梅 (名古屋大学博士課程)
"Global Film Stardom and Transmedia: Zhang Ziyi's Celebrity Culture"/ 「グローバルな映画スターダムとトランスメディアアーチャン・ツイイーの有名性文化」
- ・コメント: SUN Shaoyi 孫 紹誼 (上海大学)
- ・討論 (司会: 藤木秀朗 名古屋大学)
- <SESSION 2>
- ・ZHANG Zhen 張 真 (ニューヨーク大学)
"World Expo, Film History and the New (Old) Shanghai Imaginary"/ 「万博、映画史、新しき (古き) 上海の想像」
- ・KINOSHITA Chika 木下 千花 (静岡芸術文化大学)
"Before the Revolution: Intermediality, Mass Culture, and Japanese Cinema, 1929-1931"/ 「「革命前夜」—日本映画の間メディア・ネットワーク、1929-1931」
- ・CHEN Jie 陳 捷 (南京芸術学院)
"Blind Chance or Destiny?: The Revival of the Fatalism in Contemporary Films"/ 「ま

ったくの偶然か、それとも運命か?—現代映画における宿命論の復活」

- ・コメント: Emilie Yueh Yu YEH 葉 月瑜 (香港バプティスト大学)
- ・討論 (司会: 藤木秀朗 名古屋大学)

2012年度は、2011年度の成果をふまえ、さらにこの問題を「東アジア関係学」という枠組の中で再構築することを目指し、下記のように、「東アジア関係学の構想」と題するセミナーを4回シリーズで開催した他、名古屋大学において国際シンポジウムを開催した。

(1) セミナー・シリーズ I~IV (4回)

「東アジア関係学の構想——越境する言語・映像・文学」

【セミナーI 2012年5月24日】

中国人留学生の見た日本近代文学—研究の現在

講師: 大東和重 (関西学院大学法学部准教授)

【セミナーII 2012年7月24日】

冷戦下の日中映画往復

講師: 晏ニ (明治学院大学言語文化研究科研究員兼非常勤講師)

【セミナーIII 2012年11月19日】

「偏在する「東アジア」と文学」

講師: 高榮蘭 (日本大学文理学部准教授)

【セミナーIV 2013年1月29日】

「18世紀日本と朝鮮の相互認識・意思疎通」

講師: 池内 敏 (名古屋大学大学院文学研究科教授)

(2) 国際シンポジウム

「東アジア関係学の構想」

Towards Studies of East Asian Relations
日時: 2013年2月23・24日 / 会場: 名古屋大学文系総合館7階 カンファランス・ホール / 主催: 名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター

【シンポジウムの概要】

東アジア圏における国民国家間・地域間の歴史的・文化的関係に関する研究と教育はいかにして可能だろうか。近年、国民国家の枠組みを前提とした研究の限界が指摘され、それを超えようとする研究が盛んに発表されてきた。本シンポジウムでは、東アジアの地域間の関係、相互作用、交流に関する共同研究プロジェクトと教育プログラムについて、韓国、台湾、中国、日本からの6つの事例報告をもとに議論を行い、今後の可能性を探っ

た。

【内容】

<報告>

・MCJC と「アジアの中の日本文化」研究センターに関する報告（藤木 秀朗）

<研究プロジェクト>

・韓 榮惠（ソウル大学）「ソウル大学日本研究所の試み」
・安富 歩（東京大学）「『論語』の再解釈—学習に基づく社会秩序形成」
・劉 士永（台湾・中央研究院）「第二次世界大戦後の東アジアにおける疫病と隔離制度の再建（1945-1960）」
・研究プロジェクト討議（司会：池内 敏、名古屋大学）

<教育プログラム>

・エドワード・J・シュルツ（ハワイ大学）「東アジアの連結—ハワイからのまなざし」
・葛 兆光（復旦大学）「中国で東アジアを研究する／東アジアで中国を研究する—復旦大学文史研究院における東アジア研究（2007年度～2012年度）」
・桃木 至朗（大阪大学）「日本のある大学における「東洋史」専門教育の再建—「阪大史学の挑戦」を牽引する東洋史学専門分野」
・教育プログラム討議（司会：齋藤 文俊、名古屋大学）

・全体討議（司会：坪井 秀人、名古屋大学）

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

- ①坪井秀人・樽沼範久・岡村恵子、日記、プライベート／パブリックの境界にある「ゆらぎ」へ、Diaries: Towards the "Bulurring" of the Border Between Public and Private、『第5回恵比寿映像祭パブリックダイアリー』（カタログ）Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2013: Public Diary 2013（東京都写真美術館）、査読無、2013、12-29
- ②坪井秀人、レビュー 無償であることの幸福——「生誕 120 年記念 田中恭吉展」、JunCture（超域的日本文化研究）、査読無、04 号、2013、174-176
- ③茂登山清文、風景写真のメディアとイメージ、JunCture-超域的日本文化研究（査読有）、04 号、2013、64-74
- ④ Fuminori Akiba, Yasuhiro Suzuki、Computational Aesthetics of Tactile Sense and Its Significance for Philosophical

Aesthetics、Proceedings of 22nd Biennial Congress of the International Association of Empirical Aesthetics、査読有、2012

- ⑤秋庭史典、モノが知識を伝えるには—博物館展示物の哲学的考察、JunCture-超域的日本文化研究、査読有、03 号、2012、100-111
- ⑥齋藤文俊、漢文訓読の遺産、文学（岩波書店）、査読無、第 12 巻第 3 号、2011、65-75
- ⑦齋藤文俊、近世・近代の漢文訓読と「型」、『ことばに向かう日本の学知』（ひつじ書房）、査読無、2011、49-67
- ⑧坪井秀人、作者の決闘 — 「女の決闘」における翻訳／翻案、太宰治研究、査読無、第 19 号、2011、37-51
- ⑨坪井秀人、歌謡とジャポニスム、學士会会報、査読無、第 889 号、2011、50-54
- ⑩Hideaki Fujiki、Movie Advertisements and the Formation of a New Visual Environment in Interwar Japan、Japan Forum、査読有、vol. 23, no. 1、2011、67-98

〔学会発表〕（計 15 件）

- ①Hideaki Fujiki、Making Citizenship in Japan and Beyond: Post-3/11 Documentary Film and Audiences、International Conference of Intercultural Communication、2013 年 3 月 7 日、レイクホテル（シカゴ）
- ②藤木秀朗、MCJC と「アジアの中の日本文化」研究センターに関する報告、国際シンポジウム「東アジア関係学の構想」、2013 年 2 月 23 日、名古屋大学
- ③坪井秀人、戦争の記憶／記憶の戦争 — アジア太平洋戦争と詩の問題、国際学術大会「東アジア文学研究の現況と課題」碩學招請講演（招待講演）、2013 年 1 月 11 日、東国大学校（韓国・ソウル）
- ④Hideaki Fujiki、Cinema and Citizenship in the Age of Globalization、International Conference of Intercultural Communication、2012 年 12 月 16 日、上海師範大学
- ⑤齋藤文俊、近代移行期における日本の自国語認識、2012 東アジア韓国学国際学術大会「近代移行期における東アジアの自国語認識と自国語学の成立」（招待講演）、2012 年 11 月 29 日、韓国仁荷大学校
- ⑥Hideaki Fujiki、The Complexity of Slow Improvement: Women in Japanese Academia、Symposium: Women in Academia: Meritocracy and Gender Equality、2012 年 6 月 18 日、ソウル大学（韓国）
- ⑦ Fuminori Akiba、Can Pictures Be a Candidate for Knowledge Media?、the 5th International Conference on Intelligent Interactive Multimedia Systems and Services、2012 年 5 月 23 日、長良川国際会議場

⑧Hideaki Fujiki, Xu Dongmei, Global Film Stardom and Transmedia: Zhang Ziyi's Celebrity Culture、シンポジウム「文化の越境、メディアの越境—翻訳とトランスメディア」、2011年12月11日、上海マート（中国）

⑨坪井秀人、言葉の境界をこえる—日本近代詩史再考、上海交通大学講演会（招待講演）、2011年12月9日、上海交通大学

⑩坪井秀人、食べる身体／食べられない身体—摂食障害とマンガ・文学、国際シンポジウム「文化における身体」（招待講演）、2011年11月19日、輔仁大学（台北）

⑪藤木秀朗、「大衆」としての映画観客——戦前から戦後へ、シンポジウム「1950年代における戦前・戦中との連続性・非連続性」（招待講演）、2011年7月30日、国際日本文化研究センター（京都）

⑫秋庭史典、記譜理論から見た展示媒体の認識的機能について（ポスター発表）、第6回博物科学会、2011年6月23日、名古屋大学

⑬坪井秀人、Sexualität redet oder Girl redet.、ライプツィヒ大学日本学講演会（招待講演）、2011年6月15日、ライプツィヒ大学

⑭坪井秀人、The Invention of Minyo: The Development of the Concept and Genre through Translation、学会等名:ウィーン大学日本学講演会（招待講演）、2011年5月26日、ウィーン大学

⑮坪井秀人、Eating as “das Unheimliche” -- On the representations of the eating disorder in modern Japanese culture.、チューリヒ大学講演会（招待講演）、2011年5月24日、チューリヒ大学

〔図書〕（計3件）

①ミツヨ・ワダ・マルシアーノ（編著者）、藤木秀朗他、青弓社、「戦後」日本映画論：

1950年代を読む、2012、121-142

②坪井秀人、名古屋大学出版会、性が語る—20世紀日本文学の性と身体、2012、682

③山口俊雄、宮崎真素美、坪井秀人、ノーマ・フィールド、米谷匡史、三弥井書店、日本近代文学と戦争 「十五年戦争」期の文学を通じて、2012、265

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 文俊 (SAITO FUMITOSHI)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90205675

(2) 研究分担者

坪井 秀人 (TSUBOI HIDETO)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90197757

藤木 秀朗 (FUJIKI HIDEAKI)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90311711

茂登山 清文 (MOTOYAMA KIYOFUMI)
名古屋大学・大学院情報科学研究科
・准教授

研究者番号：10200346

秋庭 史典 (AKIBA FUMINORI)
名古屋大学・大学院情報科学研究科
・准教授

研究者番号：80252401

(3) 連携研究者

なし